

令和4年度第11回後三年合戦沼柵公開講座  
「雄勝村」の土器―雄勝城時代の土器と造山遺跡群―

特別講演2 「北海道へ渡った須恵器と秋田」

鈴木琢也(北海道博物館 学芸主幹)

はじめに

北海道では旧石器文化、縄文文化に続いて、続縄文文化(B. C. 3～A. D. 7世紀)、擦文文化(A. D. 8～12世紀)、考古学上のアイヌ文化(A. D. 13世紀以降)という独自の考古学的文化区分が設定されている(付表1)。また、続縄文文化後半～擦文文化前半の時期には、北海道北東部・東部のオホーツク海沿岸域に大陸やサハリンの文化的影響を受けたオホーツク文化(A. D. 5～9世紀)の文化圏が広がっていた。なお、この北海道の考古学的文化区分(付表1)と日本史の時代区分(付表2)を対照すると、続縄文文化は弥生時代～飛鳥時代、擦文文化は奈良時代～平安時代、考古学上のアイヌ文化は鎌倉時代以降、オホーツク文化は古墳時代～平安時代に概ね相当する。本報告では、上記のように北海道で独自の文化が展開していく続縄文文化以降、主に擦文文化(A. D. 8～12世紀)を考察の対象とする。先述した日本史の時代区分でいえば概ね奈良時代～平安時代にあたる時期を扱う。

この擦文文化の遺跡からは、須恵器や鉄製品など北海道以外の地域で生産された搬入品が豊富に出土している。その多くは本州からの交易品、搬入品であり、この時期の北海道では生産されていないものである。このようなことから、本州との間で活発な交流が展開していた状況がうかがわれ、近年の擦文文化研究においては外部との交流、特に本州との様々な交流を基軸に、その文化様相を把握していくことが大きくクローズアップされるようになってきている(瀬川, 2005・2007、養島, 2001・2015など)。交流という要素が擦文文化の成立や展開に深く関わっていたということは概ね共通した認識となっているのではないだろうか。

本報告では、これら近年の擦文文化研究の動向をふまえ、本州との様々な交流の展開を擦文文化の社会変化の要因や背景として積極的に評価していくという立場で考察を進める。具体的には、秋田(出羽国)との関係が深かったと考えられる8～9世紀と、その後の10～11世紀に区分して、北海道に搬入された須恵器や鉄製品などの本州産製品を検討し、秋田(出羽国)との交流に注目しつつ、北海道と本州との交流の様相を概観する。さらに、その交流の展開に促された擦文文化の社会変化についても考えてみたい。

なお、報告のなかでは平城京や平安京を都とした中央集権的な国家体制を指す用語として「古代国家」を使用する。また、7～11世紀に、現在の青森県全域、秋田県と岩手県の北部を含む、概ね北緯40度以北に暮らしていた地域集団の総称として「東北地方土師器文化集団」という用語を使用し考察を進める。

【付表1 北海道の考古学的文化区分】

紀元前(B.C.)												紀元(AD.)														
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
縄文時代(縄文文化)												続縄文文化						オホーツク文化			擦文文化			考古学上の アイヌ文化		

【付表2 日本史の時代区分】

紀元前(B.C.)												紀元(AD.)																			
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15					
先史												古代																			
縄文時代												弥生時代						古墳時代			飛鳥時代		奈良時代		平安時代			鎌倉時代		室町時代	

## I 8～9世紀の擦文文化と交流の様相

### 1. 擦文文化の成立過程

北海道では8世紀前半を画期として、①土器様式の変化、②墓の形態・特徴及び埋葬方法の変化、③方形竪穴住居の普及などの現象がみられる。

①土器様式の変化について、7世紀の土器様式は深鉢形土器、注口形土器、片口形土器、鉢形土器から構成され、この土器様式は続縄文文化後半の時期以来、系統的に受け継がれてきたものである。これに対して、8世紀前半～中葉の土器様式は長胴甕形土器、球胴甕形土器、甌形土器、鉢形土器、坏形土器、高坏形土器から構成され、これは東北地方土師器の土器様式と類似したものである。この土器様式の変化は、北海道の続縄文文化集団が東北地方土師器文化集団の使用する土器を模倣し、その土器様式を受け入れたことによる現象と考えられる。このことにより、続縄文文化の土器様式が終焉し、新たに東北地方土師器文化と類似した土器様式からなる擦文文化の土器様式が成立する(鈴木琢也, 2011a)。すなわち、8世紀前半を画期として擦文土器が成立したと考えることができる。

②墓の形態・特徴及び埋葬方法の変化について、北海道では3～7世紀まで続縄文文化の在り地化した土壌墓がつくられつづける。しかし、8～9世紀中葉には東北地方北部と同様の特徴をもつ末期古墳と、続縄文文化の土壌墓の特徴に加え末期古墳の特徴を受け入れた土壌墓の二系統からなる墓がみられるようになる。このように、北海道では8世紀前半を画期として墓の形態・特徴及び埋葬方法が大きく変化する。これは、続縄文文化集団が東北地方土師器文化集団の墓制を受け入れたことによる現象と考えられる(鈴木琢也, 2012)。このことにより、続縄文文化の墓制が擦文文化の墓制へと移行していく。さらに、北海道における末期古墳の成立は、東北地方北部から北海道への集団の移動・往來を示す現象でもありとされる。

③方形竪穴住居の普及は、続縄文文化集団が東北地方土師器文化集団の竪穴住居を模倣し、その住居形態や竈の使用を受け入れたことによるものと考えられる(鈴木琢也, 2016d)。

これらのことから、8世紀前半を画期として続縄文文化の土器様式、墓、竪穴住居などが東北地方土師器文化の影響を受けたものに大きく変化し、擦文文化に系統的に受け継がれていく新たな土器様式、墓、竪穴住居が出現したことが指摘できる。これら一連の文化的な変化が8世紀前半を画期にほぼ同時に進行したのである。すなわち、8世紀前半は北海道在り地の文化である続縄文文化と東北地方土師器文化との人的、文化的な接触や交流により、東北地方土師器文化の文化的要素が続縄文文化に受け入れられ、擦文文化が成立していく画期であり、この時期に新たな文化である擦文文化が成立したと考えることができよう。

## 2. 擦文文化と秋田(出羽国)の人々の交流

ここでは、北海道にみられる須恵器、横走沈線文系土器、鉄製品などの考古学資料及び文献史料の総合的な考察から、8～9世紀における擦文文化集団と東北地方土師器文化集団、さらには秋田(出羽国)の古代国家勢力との交流の様相を考察する。

### (1) 須恵器からみた交流の様相

本州産の須恵器は、北海道全域の河川河口域～中流域などに分布する約220カ所以上の遺跡から出土している。これらの須恵器は5～10世紀の年代のものである。須恵器が北海道にもたらされるようになるのは5～6世紀ころである。この時期の須恵器の分布は、北海道南西部～西部、石狩低地帯の河川河口～下流域の遺跡に僅かにみられ、あわせて10数点の須恵器が出土しているのみである(鈴木琢也, 2006a)。5世紀後半ころの年代が考えられるものとして、七飯町上藤代3遺跡の蓋(田辺I期・TK216式期ころ)、江別市大麻3遺跡の直口壺(田辺I期・TK216式期ころ)、恵庭市柏木B遺跡の把手付碗(田辺I期・TK208式期ころ)、同カリンバ4遺跡の高坏(田辺I期・TK208式期ころ)、同茂漁8遺跡の蓋(田辺I期・TK23～47式期ころ)などがある。また6世紀ころの池田町池田遺跡の坏と蓋、6世紀後半～7世紀初頭ころの大川遺跡の蓋などがある(図2・3、鈴木, 2006a)。さらに、富良野市西達布でも6世紀後半～7世紀前半の年代とされる須恵器の礎が採集されている。

北海道への須恵器の流入が本格的に増加するのは8世紀以降であり、図1に示したように8世紀後半～9世紀の須恵器の分布は石狩低地帯の遺跡に集中し、秋田城周辺の須恵器窯である秋田市新城窯跡群、古城廻窯跡群あるいは男鹿市(秋田県)の海老沢窯跡群、西海老沢窯跡群などで生産されたと考えられる須恵器がみられる。

これらの須恵器のうち、秋田市新城窯跡群・古城廻窯跡群で生産されたと考えられる須恵器坏を図2-1～26に示した。これらの須恵器坏は底部の切り離しが回転ヘラ切りで、切り離し後に粗雑なナデ調整が施されている。底部(内面)にはナデ調整の痕跡である段がみられ、中央部が瘤状にもりあがるものもみられる。器形は体部下半が湾曲してわずかにふくらみ、口縁部が少しくびれて外反する。これらは、ほぼ全て灰白色を呈する。これらの特徴などから、図2-1～26の須恵器は秋田市新城窯跡群の右馬之丞窯跡(8世紀後半)、谷地II遺跡1号窯跡(8世紀後半)、大沢窯跡I-1号窯跡(8世紀後半)、谷地II遺跡2号窯跡(8世紀末～9世紀前半)、大沢窯跡II(9世紀前半)、大沢窯跡I-2号窯跡(9世紀前半)、古城廻窯跡群の1・2・3号窯跡(9世紀前半)などで生産された可能性があり、その年代は8世紀後半～9世紀前半に位置づけられる(伊藤武士, 1998・2006、東北古代土器研究会編, 2008、鈴木琢也, 2016a・c)。

男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群で生産されたと考えられる須恵器高台付坏、須恵器高台付皿を、図2-27～29に示した。図2-

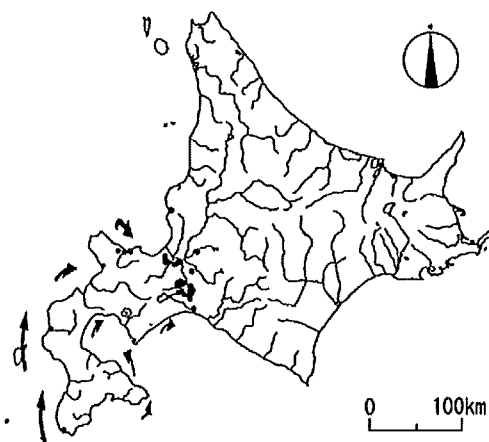


図1 北海道における須恵器の分布と流通ルート(8世紀後半～9世紀中葉)

27・28の須恵器高台付坏は底部の切り離しが糸切り(27)とヘラ切り(28)のものであり、底部の切り離し後に小さな高台がつけられている。また、器高が高く(深い)特徴的な形状を呈する。これらの特徴などから、図2-27・28の須恵器は男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群で生産された可能性があり、その年代は9世紀中葉に位置づけられる(東北古代土器研究会編, 2008)。

また、北海道東部の根室市トーサムポロ湖周辺堅穴群からは、図2-29の須恵器高台付皿が出土している((公財)北海道埋蔵文化財センター編, 2015)。この須恵器高台付皿は底部の切り離しが糸切りで、底部の切り離し後に器高の1/3ほどを占める大きめの高台がつけられている。これらの特徴などから、この須恵器高台付皿は男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群で生産されたものと考えられ、その年代は9世紀中葉に位置づけられる(東北古代土器研究会編, 2008)。男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群では灰釉陶器の高台付皿を模倣したとみられる須恵器高台付皿が多く生産されており、その一つが北海道東部の根室市にもたらされたと想定される。根室市トーサムポロ湖周辺堅穴群はオホーツク文化の集落遺跡であり、そこから在地のオホーツク土器と秋田(出羽国)産と考えられる須恵器が相伴して出土し、別な場所からではあるが擦文土器も出土している。その出土状況は、9世紀におけるオホーツク文化、本州文化、擦文文化の三つの文化の交流を示すものと考えられる。

さらに、8世紀後半～9世紀の須恵器は北海道南西部～西部日本海沿岸域の松前町館浜、せたな町南川2遺跡、泊村へロカルウス遺跡、余市町大川遺跡、同沢町遺跡などからも出土し、秋田(出羽国)産と考えられるものも含まれている。したがって、これらの地域を經由して、北海道沿岸の「日本海ルート」により石狩低地帯に須恵器が集中的に搬入されたと推測できる。しかも、近年の調査によると北海道と秋田(出羽国)の中間に位置する青森県日本海沿岸域の五所川原市十三湊遺跡や中泊町折戸遺跡などで秋田(出羽国)産とみられる須恵器が確認されている(齊藤淳, 2016)。

このことから、秋田(出羽国)産と考えられる須恵器は、秋田(出羽国)から、青森県の日本海沿岸域、さらに北海道南西部・西部の日本海沿岸

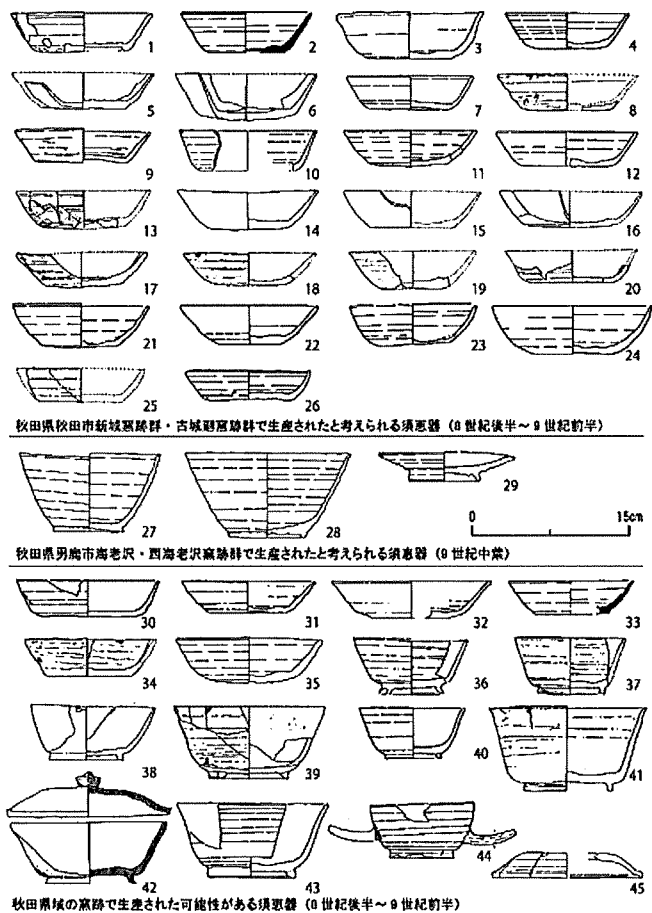


図2 北海道出土の秋田(出羽国)産と考えられる須恵器 (8世紀後半～9世紀)

(1・43・44:千歳市ユカンボシ C15 遺跡、2～4・21～24・31～33:千歳市美々8 遺跡、5・6・13～20・34・37～39:千歳市末広遺跡、7:千歳市丸子山遺跡、8・25:恵庭市中島松 6 遺跡、9:恵庭市中島松 1 遺跡、10:恵庭市茂漁 4 遺跡、11・12:札幌市 C504 遺跡、26・41:恵庭市柏木東遺跡、27・28・35 江別市後藤遺跡、29:根室市トーサムポロ湖周辺堅穴群、30・40:千歳市オサツ 2 遺跡、36:札幌市 K435 遺跡、42:恵庭市島松沢 3 遺跡、45:札幌市 K39 遺跡)

域を經由して、「日本海ルート」で北海道石狩低地帯の擦文文化集団にもたらされたと考えられる。また、秋田市新城窯跡群・古城廻窯跡群は秋田城周辺に立地しており、秋田(出羽国)の古代国家勢力及び東北地方土師器文化集団が、そこでの須恵器生産や流通に関与していた可能性が高い。つまり、北海道石狩低地帯の擦文文化集団と、秋田(出羽国)の古代国家勢力及び東北地方土師器文化集団との交流が展開していたと想定されるであろう。

次に、北海道から出土した須恵器の器種構成についてみていくと、8世紀後半～9世紀の須恵器は、坏類が全体の68%と半数以上を占めている。須恵器の坏類は壺・甕類のように液体などを入れて運ぶ容器に適した器種ではないことから、容器として北海道にもたらされたものではないと考えられる。したがって、これらの須恵器の坏類は、史料の検討から後述するように秋田城などでの朝貢や饗給などに伴い北海道にもたらされた可能性がある。一方、北海道から出土した10世紀の須恵器は壺類・甕類が全体の87%を占め、器種がそれらにほぼ限定されていく状況がみられる。須恵器の壺類・甕類は「酒」などの液体を入れる容器等に利用され北海道にもたらされた可能性がある。後述するように、この10世紀の須恵器には青森県の五所川原窯で生産されたものが非常に多くみられ、擦文文化集団と青森県域の東北地方土師器文化集団との交流にともない北海道にもたらされたものと考えられる。

すなわち、北海道から出土する須恵器の器種構成の変化は、北海道と本州の交流システムの変化を反映したものと考えられる。8世紀後半～9世紀は擦文文化集団と古代国家勢力との朝貢や饗給にともなう交流が主要なものであり、10世紀には擦文文化集団と青森県域の東北地方土師器文化集団との交流へと移行していくのである。

## (2) 鉄製品からみた交流の様相

8～9世紀の鉄製品の分布は、日本海沿岸の北海道西部、石狩低地帯の石狩川水系河川河口～下流域に集中し、その種類も刀子、斧、鋤・鋏、鎌、釘、紡錘車など実用的な生活用具類のほか武具類などが流入している。また、この時期、本州産蕨手刀の分布は北海道石狩低地帯の擦文文化の遺跡と、北海道北東部のオホーツク文化の遺跡にみられる(八木, 2010a、高島, 2005、鈴木琢也, 2014b)。8～9世紀は鉄製品や蕨手刀の分布が石狩低地帯を中心に集中する一方、本州との中間に位置する北海道南西部での出土は希薄である。しかし、蕨手刀が北海道南西部日本海沿岸域のせたな町南川2遺跡や、北海道南西部太平洋沿岸域の森町鳥崎川右岸遺跡から出土している。したがって、これらの地域を經由して、北海道沿岸の「日本海ルート」あるいは「太平洋ルート」により石狩低地帯に鉄製品(蕨手刀)が集中的に搬入されたと想定される。また、蕨手刀は北海道北東部のオホーツク文化の遺跡にもみられ、それらは北海道沿岸の「日本海～オホーツク海ルート」によりオホーツク文化集団にもたらされたものと想定される。

さらに、東北地方北部との交流ルートを検討すると、先述のように北海道から出土する須恵器には秋田(出羽国)産と考えられるものがみられることから、鉄製品(蕨手刀)についても須恵器と同様に秋田(出羽国)を主体とする地域から「日本海ルート」により北海道石狩低地帯にもたらされたものが含まれている可能性がある(鈴木琢也, 2016a・c)。一方、東北地方北部の蕨手刀の分布は、太平洋沿岸域や北上川水系流域を中心に多くみられるとされている(八木, 2010a)。したがって、鉄製品(蕨手刀)の一部は、「太平洋ルート」(青森県外ヶ浜や下北半島、北海道南西部を經由)により北海道石狩低地帯にもたらされた可能性もある。

### (3) 多条横走沈線文土器からみた交流の様相

北海道石狩低地帯の竪穴住居址と、秋田(出羽国)の雄物川水系河口域の竪穴住居址では、多条横走沈線文土器(9世紀頃)と秋田(出羽国)産と考えられる須恵器(8世紀後半～9世紀中葉)が共伴して出土した例がみられる。

さらに、多条横走沈線文土器の分布は、秋田(出羽国)から青森県域、北海道石狩低地帯にかけての日本海沿岸域を中心にみられる。このことから、9世紀頃には秋田(出羽国)から青森県域、北海道の日本海沿岸域を經由し、北海道石狩低地帯に至る「日本海ルート」による交流が展開していたと考えられ、多条横走沈線文土器を使用する日本海沿岸域の東北地方土師器文化集団と、北海道擦文文化集団がこの交流に関わっていた可能性がある(鈴木琢也, 2016a・c)。

### (4) 史料からみた交流の様相

一方、『続日本紀』靈龜元年九月一日条(715年)、『延喜式』民部下・交易雑物条(927年)、同巻四十一・彈正台(927年)、『類聚三代格』卷十九・禁制事所収の延暦二一年六月二四日太政官符(802年)などによると、8～9世紀には毛皮類(熊皮、葦鹿皮など)が北海道から本州への主要な交易品になっていたことがうかがわれる。さらに、北海道の擦文文化集団と秋田(出羽国)との関係は次の史料から裏づけられる。『続日本紀』宝龜十一年条(780年)、『日本三代実録』元慶二年条(878年)、同元慶三年条(879年)、『類聚三代格』卷十九・禁制事所収の延暦二一年六月二四日太政官符(802年)などによると、渡島蝦狄・狄・夷(擦文文化集団と想定)が秋田城を訪れ国司等の主催のもと饗応されていること、禁止令がだされるほど毛皮交易が活発に行われていたことがわかる(鈴木琢也, 2016a・c)。

以上、須恵器、横走沈線文系土器、鉄製品、文献史料の記述からみた交流の状況を総合的に考察した結果、8世紀後半～9世紀には北海道石狩低地帯の擦文文化集団と、秋田(出羽国)の古代国家勢力及び日本海沿岸域の東北地方土師器文化集団との間で、「日本海ルート」を通じた活発な交流が展開し、本州産鉄製品や須恵器と北海道産毛皮類などとの交易が行われていたと考えられる。

## 3. 擦文文化とオホーツク文化との関係

蔵手刀や須恵器の分布は、石狩低地帯の擦文文化の遺跡と北海道北東部・東部のオホーツク文化の遺跡にみられる。これらに加え、石狩低地帯の擦文文化の遺跡から皇朝十二銭の和同開珎(恵庭市柏木東遺跡)、隆平永宝(恵庭市茂漁8遺跡)、富壽神宝(千歳市ウサクマイ遺跡N地点)が出土し、北海道東部のオホーツク文化の遺跡からも神功開宝(斜里町チャシコツ岬上遺跡)が出土している。また、古代国家の官人等が身につける銚帯金具(帯金具)の丸柄が、北海道西部の擦文文化の遺跡(余市町大川遺跡)、北海道北東部のオホーツク文化の遺跡(枝幸町目梨泊遺跡)から出土している。これらのことから、古代国家勢力及び東北地方土師器文化集団と、擦文文化集団、オホーツク文化集団が個別に直接的な交流を展開していた可能性が想定される。

一方、上記の流通の様相をふまえたうえで、①8～9世紀の擦文土器が、北海道北東部・東部のオホーツク文化の遺跡である北見市トコロチャン跡遺跡、同栄浦第一・第二遺跡、同常呂川河口遺跡、同常呂遺跡、枝幸町目梨泊遺跡、同枝幸漁港遺跡、網走市ニツ岩遺跡、羅臼町トビニタイ遺跡、礼文町香深井A遺跡、斜里町伊茶仁カリカリウス遺跡、根室市弁天島遺跡などから出土し

ていること(塚本, 2012)。②オホーツク土器が石狩低地帯の擦文文化の遺跡である千歳市ウサクマイ遺跡N地点などから少数ではあるが出土していること。③先述のように毛皮類(熊皮、海獣皮など)が北海道から本州への主要な交易品になっており、特に海獣皮の主産地は北海道北東部・東部であることなどを考慮すると、古代国家勢力及び東北地方土師器文化集団とオホーツク文化集団との間で、擦文文化集団を介した交流が展開していた可能性もあるだろう。

#### 4. 小 結

以上、8世紀前半にみられる擦文文化の成立と、8世紀後半～9世紀にかけての擦文文化集団と古代国家勢力、東北地方土師器文化集団との秋田城を通じた交流の展開は、古代国家が東北地方を支配下に編入していく北進政策の影響によるものと考えられる。

このことは、7世紀後半の史料である『日本書紀』斉明四年～六年の阿倍比羅夫の遠征記事からも裏づけられる。この遠征の状況を見ると、阿倍比羅夫の軍勢が北海道を含めた北方地域の状況を把握し効率的に遠征が行われ、遠征にあたり北海道地域に陸奥蝦夷(東北地方土師器文化集団)を同行させている記事もみられる。また、阿倍比羅夫は渡島から毛皮類を交易品として持ち帰っているが、このように毛皮類を収集し交流を円滑に進めるためにも、比羅夫の遠征に伴い、あるいは遠征が行われる以前の準備段階に東北地方土師器文化集団が北海道地域に往来していた可能性が高いと考えられる。比羅夫の遠征以外にも記録にはのこらない大・小規模の遠征が行われていたとも考えられ、その遠征に先駆けて東北地方土師器文化集団が東北地方と北海道を往来していたことが推測できる。つまり、古代国家の北進政策が東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来の一つの要因になったと考えられ、「日本海ルート」による交流の基盤が整えられていったのではないかと考えられる。

ところで、7～8世紀の段階には「日本海ルート」と「太平洋ルート」が並立していたと考えられており、このことについて瀬川(2007・2016)は7世紀後葉の古代国家勢力による日本海交易ルートの掌握(阿倍比羅夫の遠征)に対抗し、太平洋側の東北地方土師器文化集団が北海道に移動・移住し、太平洋交易ルートを確認していたと想定している。もちろん、このような情勢のもとで太平洋側の東北地方土師器文化集団が北海道に移動・往来し、「太平洋ルート」による交流を展開していた可能性は十分に考えられる。一方で阿倍比羅夫は遠征にあたり、北海道地域に陸奥蝦夷(太平洋側の東北地方土師器文化集団の可能性もある)を同行させている。また、史料の記録には残らない古代国家による「太平洋ルート」の北海道遠征が行われていた可能性も否定はできない。したがって、太平洋側の東北地方土師器文化集団についても、その一部は日本海側の集団と同様に古代国家の北進政策の影響を受けて北海道に移動・往来し、交流を展開していた可能性があるのではないだろうか。

つまり、古代国家の影響はすでに7～8世紀の段階から東北地方北部及び北海道に及んでいた可能性があり、その影響を受けて日本海側あるいは太平洋側の東北地方土師器文化集団が北海道に移動・往来し、「日本海ルート」及び「太平洋ルート」による交流が展開していたと考えられる。しかも、この東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来に伴う文化接触は、先述の擦文文化の成立過程のなかで指摘したように、続縄文文化の文化的な変容を促す要素となり、続縄文文化が擦文文化に移行していく要因の一つになったのではないかと考えられる。

そして、このような太平洋・日本海の両ルートによる交流のあり方が、8世紀後半以降の古代国家勢力による秋田城を拠点とした日本海交易体制の整備にともない「日本海ルート」による交

流に集約され、擦文文化集団と秋田(出羽国)の古代国家勢力及び日本海沿岸域の東北地方土師器文化集団との交流のシステムが確立されていくのである。

すなわち、擦文文化は古代国家や東北地方土師器文化集団の強い影響に促され成立・展開した文化と考えられ、古代国家の成立に伴う日本列島規模の社会の変化及びその北進政策がその成立・展開に大きな影響を及ぼしていたものと想定される。このようななかで、秋田(出羽国)及び秋田城は擦文文化との交流に大きな役割を果たしていたと考えられる。

## II 10～11 世紀の擦文文化と交流の様相

### 1. 擦文文化の拡散

北海道における擦文文化期の竪穴住居跡の分布をみると、8～9 世紀の分布は石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中している。その数をみても同地域に多くが集中している。10 世紀の分布は、北海道北部の日本海沿岸河川河口域や石狩川水系中流域に拡がり、特に北海道北部の日本海沿岸河川河口域でその数が増加している。11 世紀の分布は、前代までの地域に加え北海道北東部のオホーツク海沿岸河川河口域や北海道南部～東部の太平洋沿岸河川河口域にみられ、北海道全域に分布が拡がっていく。特に北海道北東部のオホーツク海沿岸河川河口域でその数が増加している(澤井, 2007、鈴木琢也, 2016d)。

擦文文化期の竪穴住居跡の分布は、8～9 世紀に石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中し、10～11 世紀にかけて北海道全域に拡がっていく。このことは、10 世紀を画期とした擦文文化集団の北海道全域への拡散・移動を示すものと考えられる。10 世紀以降には北海道北東部や東部のオホーツク文化集団にかわって、擦文文化集団がこれらの地域に進出していった状況がうかがわれる。

### 2. 本州産製品の拡散

先述の擦文文化集団の北海道全域への拡散に連動するように本州産製品もそれらの地域に拡散していく状況がみられる。

須恵器は 10 世紀以降に北海道全域に拡散し、青森県五所川原産須恵器が多くを占めるようになる。その分布は石狩低地帯や日本海沿岸域に加え、北海道南部～東部太平洋沿岸の河川河口～中流域にもみられ、10 世紀以降に擦文文化集団と青森県域の東北地方土師器文化集団との「日本海ルート」、「太平洋ルート」による交流が活発化したものと考えられる。また、五所川原産須恵器の分布は北海道北東部オホーツク海沿岸域にも拡がり、それらの地域にも青森県域の東北地方土師器文化集団との交流が波及したと考えられる(鈴木琢也, 2004)。

鉄製品は 10～11 世紀にかけて北海道全域に拡散し、その種類も多様化する。その分布は北海道南西部～北西部の日本海沿岸域と、北海道南部～東部の太平洋沿岸域に拡散していく状況がみられ、10 世紀以降に擦文文化集団と本州との「日本海ルート」、「太平洋ルート」による交流が活発化したと想定される。また、鉄製品の分布は北海道北東部オホーツク海沿岸域にも拡がり、それらの地域にも本州との交流が波及した状況がみられる(鈴木琢也, 2005)。

10～12 世紀には銅鏡が青森県域から北海道南部～東部太平洋沿岸の河川河口域～中流域に至る「太平洋ルート」により流通していたと考えられ、これらの地域間で交流が展開していたと想定される(鈴木琢也, 2011b)。なお、青森県域を含めた東北地方北部では、銅鏡の生産に関わる



遺構が確認されていない。したがって、銅鏡は東北地方北部以南の地域で生産され流通したものと考えられ、それらが青森県域を経由して北海道南部～東部地域にもたらされたと考えられる。

### 3. 東北地方北部の文化的・経済的な発展と交流ルートの展開

先述の北海道擦文文化集団と青森県域の東北地方土師器文化集団との交流の活発化に連動するように、東北地方北部では9世紀後半～11世紀に竪穴住居(竪穴建物)の数が増加し、人口の増加がみられるとされている(北東北古代集落遺跡研究会編, 2014)。また、青森県の津軽地方、外浜、日本海沿岸域などでは鉄製品、須恵器、塩などの生産に関わる9世紀後半～11世紀の遺跡が多くみられ、これらの製品の生産活動が活発化していく状況がうかがわれる(三浦, 1994、佐藤, 2006)。さらに、青森市石江遺跡群新田(1)遺跡(10世紀後半～11世紀)などのような交流拠点となる遺跡がみられるようになるとされている(三浦, 2006、斉藤, 2006、鈴木靖民, 2014、小口, 2014など)。このような東北地方北部における文化的・経済的な発展や交流拠点の成立を背景として、擦文文化集団と青森県域の東北地方土師器文化集団との間の「日本海ルート」、「太平洋ルート」を通じた交流が活発化したものと考えられる。

さらに、この新田(1)遺跡が所在する外浜から奥六郡をへて陸奥国府へと通じる北方交易品の交易・貢進のための「内陸交流ルート(原奥大道)」が存在していたことも想定されている(斉藤, 2007)。この「内陸交流ルート」に続いて、北海道への海上交流ルートが存在していたと考えられ、従来の「日本海ルート」に加え、外浜から北海道への「太平洋ルート」が整備されたと考えられる。

### 4. 交流の背景

10～11世紀には水豹皮、鷲羽(肅慎羽)、奥州貂裘などが北海道から本州への交易品として主要なものであったと想定される。この時期には、北海道産の毛皮類や鷲羽などが東北地方の有力な在地勢力である清原氏から陸奥守・鎮守府将軍への献上品、あるいは陸奥守・鎮守府将軍から「都」の有力貴族(古代国家勢力)への献上品となっており、北海道産の毛皮類や鷲羽などが東北地方諸勢力を経由して「都」の有力貴族に貢納される状況がうかがわれる。例えば、『御堂関白記』長和元年閏十月廿一日条(1012年)や『小右記』長和三年二月七日条(1014年)には、鎮守府将軍藤原兼光や平維良から藤原道長への献上品として鷲羽がみえるなど、陸奥・出羽守や鎮守府将軍に任命された軍事貴族などがこれらの交易品を「都」の有力貴族への献上品としていたことがうかがわれる(鈴木琢也, 2005・2006b)。また、『奥州後三年記』上(1083年)には、清原真衡が陸奥守である源義家(軍事貴族)を饗応し、北海道の産物と考えられるあざらし(毛皮)や鷲羽を献上した記録がみられる。

すなわち、10～11世紀に擦文文化集団と青森県域の東北地方土師器文化集団との交流が隆盛する背景には、北海道産の毛皮類や鷲羽などを入手し「富」を蓄積するとともに、それらを「都」の有力貴族に貢納することで勢力を拡大する安倍氏・清原氏や軍事貴族の関与がうかがわれる。擦文文化集団から青森県域の東北地方土師器文化集団にもたらされた毛皮類、鷲羽などは、安倍氏・清原氏や軍事貴族を経由して、「都」の有力貴族へ貢納されていたと考えられるのである。

### 5. 小 結

これまでの考察をふまえ、10～11世紀の北海道と本州との間の交流の実態は次のように整理することができる。それは、①北海道擦文文化集団⇔②青森県域の東北地方土師器文化集団⇔③

安倍氏・清原氏勢力及び軍事貴族⇔④「都」の有力貴族(古代国家勢力)のような関係である。

上記のような流通及びそれに伴う交流のなかで、10～11世紀には擦文文化集団が北海道全域へ拡散していく現象がみられる。その背景には様々な要素が考えられるが、その一つとして本州向けの交易資源となる毛皮類や鷲羽などの獲得という要素があったのではないかと想定される。ここで重要なことは、擦文文化集団の北海道全域への拡散に連動して本州産製品もそれらの地域に流入していることである。つまり北海道北部や東部など各地に拡散した擦文文化集団も豊富な本州産製品を入手しているということであり、また北海道北部や東部などは本州向け交易品(毛皮類や鷲羽など)が豊富に入手できる地域でもある。このようなことから、擦文文化集団の拡散は本州産製品を得るための対価となる本州向け交易品の獲得と関係している可能性がある。

一方、同じ時期の東北地方北部においては鉄製品や須恵器などの生産活動が活発化し、交流拠点が成立するなど青森地域の東北地方土師器文化集団の文化的・経済的な発展がみられるようになり、そこで生産された製品が擦文文化集団にもたらされたものと考えられる。

また、この交流活発化の背景には、安倍氏・清原氏勢力及び軍事貴族など東北地方諸勢力の関与がうかがわれる。安倍氏・清原氏勢力及び軍事貴族は、毛皮類、鷲羽などの北海道を含む北方地域の特産物を擦文文化集団から東北地方土師器文化集団を経由するかたちで入手し、それらを最終的には都の古代国家勢力に貢納することで、東北地方において勢力を拡大していったものと想定される。

すなわち、10～11世紀における交流の展開は、擦文文化集団を交易活動の推進及び文化圏の拡大に導くなど、その社会のあり方を変化させていく要因になったと考えられ、一方で安倍氏・清原氏勢力及び軍事貴族が台頭する経済的基盤を支える要素の一つにもなったと考えられる。

## おわりに

ここまで、擦文文化を8～9世紀、10～11世紀に区分して、この時期ごとに北海道に搬入された本州産製品からみた北海道と本州の人々の交流の様相を概観するとともに、その交流の展開に促された擦文文化の社会変化について考察してきた。

8～9世紀は擦文文化の成立期と考えられ、北海道の続縄文文化集団と、東北地方土師器文化集団、古代国家との人的、文化的な交流により、北海道石狩低地帯を中心とする地域で擦文文化が成立し、8世紀後半以降に擦文文化集団と、秋田(出羽国)の古代国家勢力及び日本海沿岸域の東北地方土師器文化集団との日本海ルートによる交流システムが確立する。この時期には上記の交流に加えオホーツク文化との交流をまじえた、北海道と本州の交流が展開する。

10～11世紀は擦文文化の拡散期と考えられ、擦文文化集団と青森地域の東北地方土師器文化集団との日本海・太平洋ルートを通じた交流の展開を背景として、擦文文化集団が本州に供給する資源(毛皮類、鷲羽など)の獲得などを目的に北海道全域に拡散していく時期である。この交流が隆盛する要因の一つとして、安倍氏・清原氏勢力及び軍事貴族などの関与がうかがわれる。

そして、本報告ではふれることができなかったが、この後の12～13世紀は擦文文化変容期と考えられ、擦文文化集団と平泉藤原氏勢力などとの広域的な交流が展開し(八重樫, 2016・2019、鈴木琢也, 2022)、交流の拠点地域が石狩低地帯から北海道南西部・西部・南部などの海岸や河川の湊に適した地域(本州との交流の窓口に適した地域)に移り変わるとともに、それらの地域に本州集団が進出しはじめることなどを背景として、擦文文化集団と本州集団との人的、文化的な

交流により、擦文文化が考古学的な文化区分でいうアイヌ文化へと変容していく時期である(鈴木琢也, 2016b・2020)。

このように、擦文文化の社会は自己完結していたわけではなく、交流を通じて本州の古代国家、東北地方諸勢力、東北地方土師器文化集団から様々な影響を受けるなかで段階的に変化をとけていくとともに、本州との交流に適応した独自の文化を再構築し、最終的には考古学的な文化区分でいうアイヌ文化の成立に向かっていくのではないかとの、見通しをもっている。

そして、このような交流のなかで、出羽国や秋田城あるいは清原氏などが果たした役割は大きく、擦文文化の社会に大きな影響を及ぼしたと考えることができる。

## 引用・参考文献

- 伊藤武士 1998; 秋田城周辺須恵器窯跡の動向について. 秋田考古学, 第46号, 秋田考古学協会, pp. 1-36.  
2006; 秋田城跡 最北の古代城柵. 日本の遺跡 12, 同成社, p. 193.
- 小口雅史 2014; 石江遺跡群の歴史的背景とその展開. 石江遺跡群発掘調査報告書, VII, 第三分冊, 青森市埋蔵文化財調査報告書, 第116集, 青森市教育委員会, pp. 265-276.
- 北東北古代集落遺跡研究会編 2014; 9~11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究. 北東北古代集落遺跡研究会(研究代表者: 船木義勝), p. 326.
- (公財)北海道埋蔵文化財センター編 2015; 根室市トーサムボロ湖周辺堅穴群(1). (公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書, 317, (公財)北海道埋蔵文化財センター, p. 583.
- 斉藤 淳 2016; 土器からみた地域間交流-秋田・津軽・北海道-. 北方世界と秋田城, 考古学リーダー25, 六一書房, pp. 155-190.
- 斉藤利男 2006; 北方世界のなかの平泉・衣川-日本史における「北」の可能性-. 歴史評論, 678号, pp. 2-16.  
2007; 都市衣川・平泉と北方世界. 平泉・衣川と京・福原, 高志書院, pp. 107-154.
- 佐藤智生 2006; 青森県における防御性集落の時代と生業. 北の防御性集落と激動の時代, 同成社, pp. 93-120.
- 澤井 玄 2007; 土器と堅穴の分布から読み取る擦文文化の動態. 古代蝦夷からアイヌへ, 吉川弘文館, pp. 324-351.
- 鈴木琢也 2004; 擦文文化期における須恵器の拡散. 北海道開拓記念館研究紀要, 第32号, pp. 21-46.  
2005; 擦文文化における物流交易の展開とその特性. 北海道開拓記念館研究紀要, 第33号, pp. 5-30.  
2006a; 古代北海道における物流経済. アイヌ文化と北海道の中世社会, 北海道出版企画センター, pp. 19-31.  
2006b; 北日本における古代末期の北方交易-北方交易からみた平泉前史-. 歴史評論, 678号, pp. 60-69.  
2011a; 北海道における7~9世紀の土器の特性と器種組成様式. 北海道開拓記念館研究紀要, 第39号, pp. 13-36.  
2011b; 北日本における古代末期の交易ルート-十~十二世紀を中心として-. 古代中世の蝦夷世界, 東北学院大学東北文化研究所編, 高志書院, pp. 201-226.  
2012; 北海道における3~9世紀の土壇墓と末期古墳. 北方島文化研究, 10, 北海道出版企画センター, pp. 1-40.  
2014b; 北海道の末期古墳と蕨手刀. 北三陸の蝦夷・蕨手刀, 岩手考古学会, pp. 47-54.  
2016a; 擦文文化の成立過程と秋田城交易. 北海道博物館研究紀要, 第1号, pp. 1-18.  
2016b; 平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容. 歴史評論, 795号, pp. 16-27.  
2016c; 須恵器からみた古代の北海道と秋田. 北方世界と秋田城, 六一書房, pp. 191-214.  
2016d; 北海道地域の動態-交流・交易を中心として-. 日本考古学協会2016年度弘前大会「北東北9・10世紀社会の変動」研究発表資料集, 一般社団法人日本考古学協会, pp. 107-122.  
2020; 擦文文化と奥州藤原氏-北日本中世初期の交流史-. 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌 Arctic Circle, 116号, pp. 4-9.  
2022; 平泉無量光院跡出土の擦文土器-擦文文化集団と平泉の集団の交流についての予察-. 北海道博物館研究紀要, 第7号, pp. 1-8.
- 鈴木靖民 2014; 日本古代の周縁史. 岩波書店, p. 307.
- 瀬川拓郎 2005; アイヌ・エコシステムの考古学. 北海道出版企画センター, p. 245.  
2007; アイヌの歴史 海と宝のノマド. 講談社選書メチエ, 講談社, p. 278.  
2016; アイヌと縄文. ちくま新書, 筑摩書房, p. 237.
- 高島孝宗 2005; オホーツク文化における威信財の分布について. 海と考古学, 海交史研究会考古学論集刊行会, pp. 23-44.
- 塚本浩司 2012; トコロチャシ遺跡オホーツク地点7号堅穴出土の擦文土器(土師器)について-北海道東部の初期段階の擦文土器-. トコロチャシ遺跡オホーツク地点, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室常呂実習施設, pp. 253-270.
- 東北古代土器研究会編 2008; 東北古代土器集成-須恵器・窯跡編(出羽)-, 研究報告4, 東北古代土器研究会, p. 179.
- 三浦圭介 1994; 古代東北地方北部の生業にみる地域差, 北日本の考古学, 吉川弘文館, pp. 149-174.  
2006; 北奥の巨大防御製集落と交易・官衙類似遺跡-平泉誕生の前史-. 歴史評論, 678号, pp. 70-84.
- 養島栄紀 2001; 古代国家と北方社会. 吉川弘文館, p. 368.  
2015; 「もの」と交易の古代北方史-奈良・平安日本と北海道・アイヌ. 勉誠出版, p. 363.
- 八重樫忠郎 2016; 東北の経塚と厚真町の常滑壺. 歴史評論, 795号, pp. 28-34.  
2019; 平泉の考古学. 東北中世史叢書2, 高志書院, p. 313.
- 八木光則 2010a; 古代蝦夷社会の成立. ものが語る歴史 21, 同成社, p. 288.